

礫ヶ浦ツナミアイトの堆積場と堆積過程

Setting and sedimentary process of Tsubutegaura tsunamiite succession

志岐 常正[1], 山崎 貞治[2], 橋 徹[3]

Tsunemasa Shiki[1], Teiji Yamazaki[2], Toru Tachibana[3]

[1] なし(京大), [2] 大教大・教育・自然, [3] 瀬戸内環境地質研究会

[1] (Kyoto Univ), [2] Natural Sci., Osaka Kyoiku Univ, [3] Reserch Org. for Environmental Geology of Setouchi

知多半島礫ヶ浦海岸に、中新統のツナミアイト（津波に關係して形成された堆積物）や地震性堆積物（液状化～流動化構造の発達する堆積物、各種の碎屑岩脈など）のサクセションが分布する。そのうちツナミアイト礫岩については、すでにその産状その他が報告されている（Shiki & Yamazaki, 1996）。

これらツナミアイト、セイスライトの堆積にかかわる地震は、日本海の発生・拡大、西南日本の回転に伴うフィリピン海プレート沈み込みによるイベントと考えられる。10枚を超える中粒砂ツナミアイトの多くは、海浜からの引き波によって、この半深海上部（水深200m、またはそれ以上）の堆積場に運び込まれたものと見なしてよい。しかし、径3mを超える巨礫やこれを含む礫岩層の堆積過程はこれと異なる。

当時、越前海岸から知多半島西岸をかすめ、南海トラフに延びる断層が活動していた（林, 1985）。西南日本弧は全体が一本の棒として回転したのでなく、この断層によって区切られた二つのセグメントをなしていたのである。礫ヶ浦のすぐ西には断層崖によって区切られた浅い堆積層があり、この断層の活動によって崩壊した崖の岩石や堆上からの礫が、まだ海底でしっかり落ち着かないうちに、その断層活動自身による津波によって動かされたものと考えられる。